

教職志望学生が考える教員の資質能力

川野 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2012年11月8日受付、2012年12月13日受理)

要 旨

教職志望3・4年の学生が教員の資質能力としてどのような内容を重視しているかについて、学生の性格と86項目の調査票を作成して分析整理した。教員の資質能力については8領域を設定して性格と各領域について割合と統計的検定を行ったところ有意差が見られた。教員の資質能力について、将来の教員を目指す学生自身の視点からの具体的な資質能力を検討した。結果は、「専門的知識・技能がある」「児童生徒に学ぶ意欲を持たせられる」「児童生徒の可能性を伸ばせる」「コミュニケーション力がある」「児童生徒を信頼することができる」など多くの内容項目を教員に必要な資質能力と認知していた。

1 研究課題

教員の資質能力に関しては、これまでも多くの教員養成系大学や中央教育審議会等では取り上げられてきた。その中で先ず、教員の資質能力に関連するこれまでの答申は、次の6つが挙げられる。①昭和62年12月教育職員養成審議会答申「教師の資質能力の向上方策等について」、②平成9年7月教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」、③平成10年10月教育職員養成審議会第二次答申「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について—現職教員の再教育の推進—」、④平成11年12月教育職員養成審議会第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」、⑤平成14年2月中央教育審議会答申「今後の教員免許制度の在り方について」、⑥平成17年10月中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」である。これら6答申の骨子について要約する。

昭和62年の「教師の資質能力の向上方策等について」では、資質能力を「教育者としての使命感」、「人間の成長・発達についての深い理解」、「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」、「教科等に関する専門的知識」、「広く豊かな教養」、「これらを基盤とした実践的指導力」などとして、その重要性を説いている⁽¹⁾。

平成9年の「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」では、昭和62年の答申を「いつの時代にも求められる資質能力」ととらえ、それらに加えて、これからの教師には変化の激しい時代にあって、「児童生徒たちに自ら学び自ら考える力」や豊かな人間性などの「生きる力」を育成することを期待している。そして今後とくに教師に求められるものがある

として、「地球的視野に立って行動するための資質能力」、「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」、「教師の職務から必然的に求められる資質能力」を例としてあげている⁽²⁾。

平成10年の「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について－現職教員の再教育の推進－」では、教員は学校教育課題に取り組み、日々の教科指導、生徒指導等を創造的に実践し、変化の激しい新たな時代に適切に対応することが大切であると述べている。そのために、学部等での資質能力を基盤とし、大学院において理論と実践を融合する研究を行うことが必要であると提言している⁽³⁾。また現職教員が教職経験を通じて形成した教育課題解決のため、修士課程で学修する機会を与えることが重要であるとしている。

平成11年の「養成と採用・研修との連携の円滑化について」では、教員の質能力について、第1次答申を踏まえ、「専門的職業である『教職』に対する愛着、誇り、一体感に支えられた知識、技能の総体」が大切であると述べている⁽⁴⁾。そして、昭和62年答申にあるように、「教育者としての使命感」、「人間の成長・発達についての深い理解」「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」、「教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養」、そしてこれら4つを基盤とした「実践的指導力」がいつの時代にも教員に求められる資質能力であるとしている。

平成14年の「今後の教員免許制度の在り方について」では、教員免許更新制という新たな制度を設計し、そうした制度の中で教員の資質能力を担保していく取り組みが述べられている⁽⁵⁾。また教員の資質能力の適正化を図るため、指導力不足教員等に対する人事管理システムの構築が提言されている。また教員採用試験では人物重視の推進と教員の専門性の向上を図るために、ライフステージに応じた研修の大切さを述べている。

平成17年の「新しい時代の義務教育を創造する」では、優れた教師の条件について「教職に対する強い情熱」、「教育の専門家としての確かな力量」「総合的な人間力」の3要素が重要と述べている⁽⁶⁾。またいつの時代にも必要な資質能力として、「教職への使命感と情熱」、「専門職としての指導力」、「豊かな人間性」を掲げているが、これらのことは、今までの教員の資質能力をキーワードとしてまとめたものと解される。

一方、教員養成系大学における教員の資質能力に関する研究では、現職教員を対象に教員の資質能力についての調査研究、教員養成系学部学生と現職教員との教職能力に関する認知の比較研究、教育実習に関わる学生の資質能力についての実地研究など、様々な内容のものが研究されている。教員の資質能力に関する研究内容は多岐にわたっており、教職を目指す学生を対象にした調査研究は見られるものの、教職志望学生が考える教員の資質能力に関する調査研究は少ないようである。そうした中、小泉令三・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文「教員養成系学部学生と教師の教職能力の認知構造の比較」では、教員の資質能力が問題にされる場合の具体的な資質能力について整理している⁽⁷⁾。そこでは教育実習で求められる資質や能力を教職能力として教育実習での資質能力や教員自身が考える資質能力について述べている。そして学生と教員との教職能力の捉え方や認知の違いについて、アンケート調査をもと

に因子分析を中心に学生と教員との認知構造の違いを分析している。そこで本研究では、教職を目指す学生自身が教員の資質能力としてどのような内容のものを重視しているかについて、学生が考える教員の資質能力の予備調査をもとにアンケート項目を作成し、その調査項目を分析整理して教員の資質能力を考えていくことにした。

2 研究内容

(1) 調査用紙作成

教職志望の3、4年生が考える教員の資質能力として、どのような内容が大切であるかについての自由記述をもとに調査用紙を作成した(資料)。

(2) 調査票の分析

①回答学生の性格

まず、教職を目指している3年生と4年生の学生に、「あなたの性格は人からどのように思われていると思いますか」について、29項目の中から複数回答法で求めた。下の図1、2の結果が得られた。4年生では割合が高い上位5項目は、「明るい」(69%)、「社交的」(56%)、「負けず嫌い」(50%)、「素直」(50%)、「デリケート」(44%)であった。3年生では割合が高い上位5項目は、「明るい」(58%)、「のんびりや」(50%)、「気分や」(41%)、「負けず嫌い」(37%)、「社交的」(33%)であった。3年生では「のんびりした」と「気分や」という性格傾向が目立っており、4年生では「社交的」と「素直」という性格傾向が見られる。こうした傾向はいちがいに言えないが、4年生が調査時点では教員採用試験に必死に取り組んでいる状況が反映されていると考える。

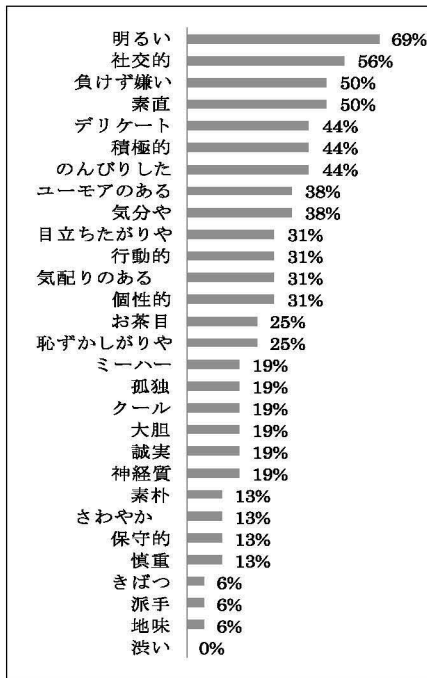


図1 4年生の性格

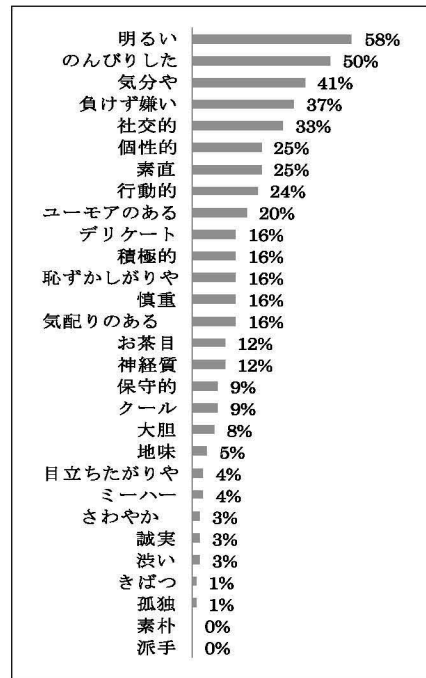


図2 3年生の性格

4年生と3年生の各性格について、平均点の検定を行ったところ、表1の「誠実な性格」を始め、「素直な性格」($P = 0.028 < 0.05$)、「社交的な性格」($P = 0.047 < 0.05$)、「積極的な性格」($P = 0.014 < 0.05$)、「ミーハーな性格」($P = 0.033 < 0.05$)、「さわやかな性格」($P = 0.043 < 0.05$)、「デリケートな性格」($P = 0.014 < 0.05$)、「目立ちたがりやな性格」($P = 0.000 < 0.05$)の8項目について4年生の方に有意差がみられ、他の項目には有意差はなかった。

表1 「誠実な性格」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	0.188	0.027	0.160	$P=0.011 < 0.05$
標準偏差	0.403	0.371		有意差あり

② 資質能力の8カテゴリー分類

次に教員の資質能力の86項目について、その資質能力を類型別にまとめることを考えた。資質能力を考える場合、その資質能力は論者によって基準が明確にされていない場合もある。

特に政策関係の答申等では総括的な表現が使われている。答申という性格上、資質能力を具体的・個別的に述べることは、その価値や内容等を強制しているとも受け取られかねないからであろう。資質能力を抽象的に述べた方が、広範囲の内容を包含できるからだろう。また教職関係者が資質能力について話をする場合、教員としての使命感や教育的愛情など体験にもとづく内容であったり、一般的・概念的な言葉を使用した方が相手に伝わる場合も多い。このように資質能力が非常に幅広い意味と内容を含む言葉なので、それもやむを得ないことである。前述の昭和62年教育職員養成審議会答申「教師の資質能力の向上方策等について」では、「教育者としての使命感」、「教科等に関する専門的知識」、「広く豊かな教養」などの文言が使用されている。その内容には合点がいくものの、改めて「使命感の具体的内容はどういうものか」、「専門的知識はどのような内容で、どういったものか」を考えると、その基準や具体的内容が明確に定義されていない場合も多い。そこで本稿では、資質能力を大きく「資質」と「能力」に二分し、次に「資質」は教員としての情意面を表現し、「能力」は認知技能面を表現するものにとらえた。そしてブルームの教育目標の分類を援用し、認知技能面に關わる内容をさらに「知識・理解・技能」、「分析」、「総合」、「実施・対応」、「評価」の5カテゴリーに分け、情意面を「感受性」、「価値づけ」、「自覚」の3カテゴリーに分類した。結果として資質能力86項目を8カテゴリーに分類して考え、表2に8カテゴリーを一覧表にしてまとめた。なお教育学を専門とする教員1名に8カテゴリーの分類を検討してもらったところ、一致度は高かった。

③ 知識・理解・技能領域

表2 資質能力の8カテゴリー

資質能力の8領域	資質能力の全体的意味・着眼点
知識・理解・技能	専門的な知識や技能を持っており、それを使うことができる
分析	情報の中から必要な事実や関係を見付けることができる
統合	必要な要素を組み合わせて新たなものを創り上げることができる
実施・対応	相手と対応しながら計画を実施することができる
評価	実施したことの評価判断をすることができる
感受性	感受性を働かせて状況を感じ取り、積極的に対応しようとする
価値づけ	対象に意義や価値を感じ、改善向上のために意欲的に取り組もうとする
自覚	自己の役割を自覚し、それを果たそうとする

資質能力86項目のすべてについて、「あてはまる」に4点、「ややあてはまる」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「あてはまらない」に1点を与えて、各項目の平均点を求めた。

表2は、知識・理解・技能領域14項目における3年生と4年生の平均値である。この平均点の割合を棒グラフで示したものが図3である。

図3から分かるように、「報告・連絡・相談ができる」、「伝える力がある」の2項目は、4年生全員が教員の資質能力として「あてはまる」と回答していた。また14項目中13項目が $X = 3.75$ 以上の平均点を示している。ただ、「字がきれいである」という項目は、教員の資質能力としては、他の項目に比べると低い得点であった。3年生は、14項目中11項目が $X = 3.55$ 以上の得点であった。その中で「字がきれいである」は、4年生と同じように「あてはまる」と回答した割合が低かった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べ結果、例えば「カウンセリングができる」という項目に関しては、4年生が3年生よりも教員としての資質能力を有意に認知していた(表3)。

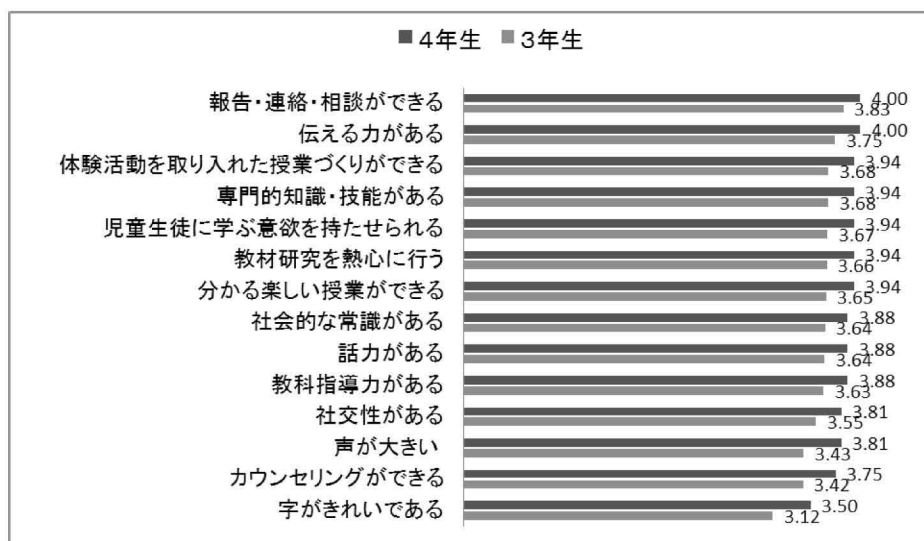


図3 知識・理解・技能領域のグラフ

表3 「カウンセリングができる」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.813	3.405	0.407	$P=0.011 < 0.05$
標準偏差	0.403	0.595		有意差あり

以下同様に「字がきれいである」($P = 0.036 < 0.05$)、「社会的な常識がある」($P = 0.039 < 0.05$)、「社交性がある」($P = 0.022 < 0.05$)、「声が大きい」($P = 0.034 < 0.05$)、「専門的知識・技能がある」($P = 0.005 < 0.05$)、「体験的活動を取り入れた授業づくりができる」($P = 0.006 < 0.05$)、「伝える力がある」($P = 0.035 < 0.05$)、「話力がある」($P = 0.035 < 0.05$)、「教材研究を熱心に行う」($P = 0.044 < 0.05$)の各項目に関して、4年生が3年生よりも有意に認知していた。

④ 分析領域

分析領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、多くの情報の中から必要な事実や関係を見付けることができる資質能力である。

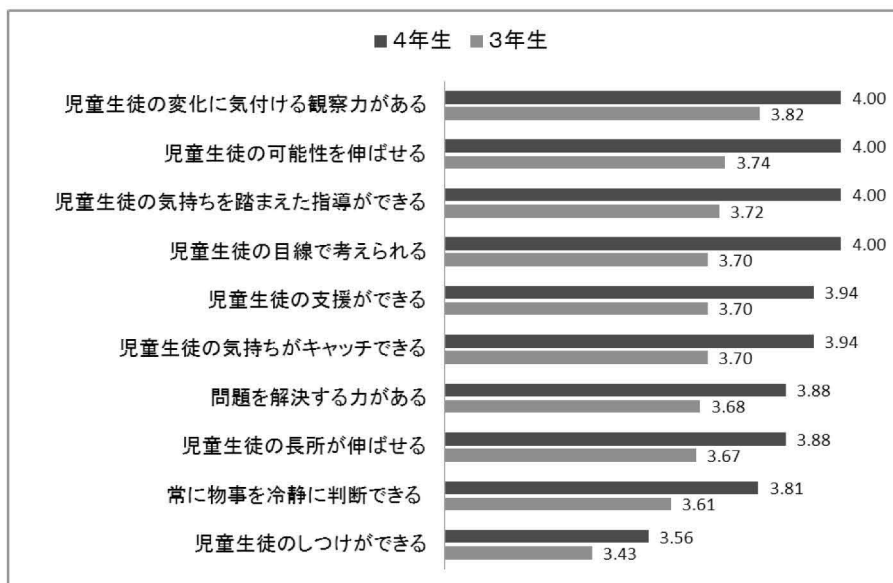


図4 分析領域のグラフ

図4は、分析領域10項目の平均点を棒グラフで示したものである。「児童生徒の変化に気付ける観察力がある」、「児童生徒の可能性を伸ばせる」、「児童生徒の気持ちを踏まえた指導ができる」、「児童生徒の目線で考えられる」の4項目は4年生全員が $X = 4.00$ 点の「あてはまる」と回答していた。一方、3年生のこの4項目については、 $X = 3.82 \sim 3.70$ の平均点であった。他に「児童生徒の支援ができる」、「児童生徒の気持ちがキャッチできる」、「問題を解決する力がある」、「児童生徒の長所が伸ばせる」、「常に物事を冷静に判断できる」の5項目は4年生では $X = 3.94 \sim 3.81$ の高い得点であり、3年生も $X = 3.70 \sim 3.61$ の平均点であった。「児童生徒のしつけができる」は4年生が $X = 3.56$ 、3年生が $X = 3.43$ であり、他の項目に比べて低い平均点であった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、有意差が見られた(表4)。

表4 「常に物事を冷静に判断できる」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.813	3.608	0.204	P=0.048<0.05
標準偏差	0.403	0.544		有意差あり

同様に「問題を解決する力がある」(P = 0.033 < 0.05)の項目に関して、4年生が3年生よりも有意に認知していた。

⑤ 統合領域

総合領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、必要な要素を組み合わせることで新たなものを創り上げることができる資質能力である。

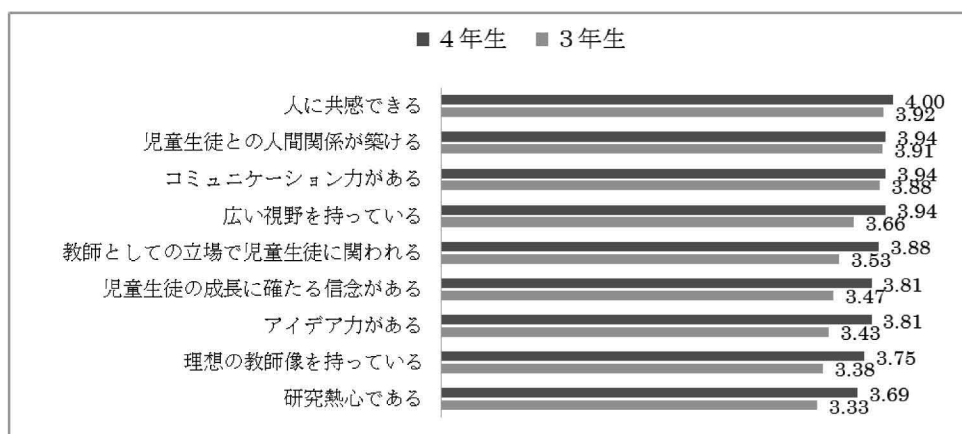


図5 統合領域のグラフ

図5は、統合領域9項目の平均点を棒グラフで示したものである。4年生では「人に共感できる」がX=4.00、「児童生徒との人間関係が築ける」、「コミュニケーション力がある」、「広い視野を持っている」が共にX=3.94、「教師としての立場で児童生徒に関われる」がX=3.88、「児童生徒の成長に確たる信念がある」、「アイデア力がある」が共にX=3.81、「理想の教師像を持っている」がX=3.75であった。3年生の以上8項目の平均点はX=3.92~3.38であった。一方、「研究熱心である」は他の得点に比べると低かった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、有意差が見られた(表5)。

表5 「理想の教師像を持っている」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.813	3.405	0.407	P=0.017<0.05
標準偏差	0.403	0.639		有意差あり

同様に「教師としての立場で児童生徒に関われる」(P = 0.034 < 0.05)、「研究熱心である」(P = 0.018 < 0.05)、「広い視野を持っている」(P = 0.003 < 0.05)、「児童生徒の成長に確たる信念がある」(P = 0.002 < 0.05)の項目に関して、4年生が3年生よりも有意に認知していた。

⑥ 実施・対応領域

実施・対応領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、相手と対応しながら計画を実施することができる資質能力である。

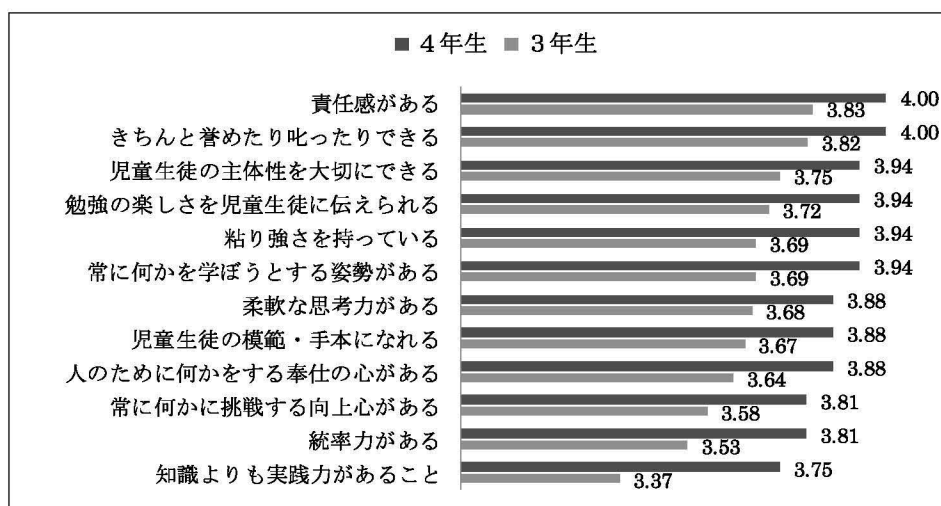


図6 実施・対応領域のグラフ

図6は、実施・対応領域12項目の平均点を棒グラフで示したものである。4年生では、「責任感がある」と「きちんと褒めたり叱ったりできる」をはじめ、四捨五入すれば、12項目すべてがX = 3.8以上であった。3年生では、11項目がX = 3.5以上であった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、有意差が見られた(表6)。

表6 「児童生徒の主体性を大切にできる」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.938	3.743	0.194	P=0.027<0.05
標準偏差	0.250	0.498		有意差あり

同様に「人のために何かをする奉仕の心がある」(P = 0.028 < 0.05)、「児童生徒の模範・手本になれる」(P = 0.045 < 0.05)、「知識よりも実践力があること」(P = 0.020 < 0.05)、「統率力がある」(P = 0.009 < 0.05)、「粘り強さを持っている」(P = 0.008 < 0.05)の項目に関して、4年生が3年生よりも有意に認知していた。

⑦ 評価領域

評価領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、実施したことの評価判断をすることができる資質能力である。

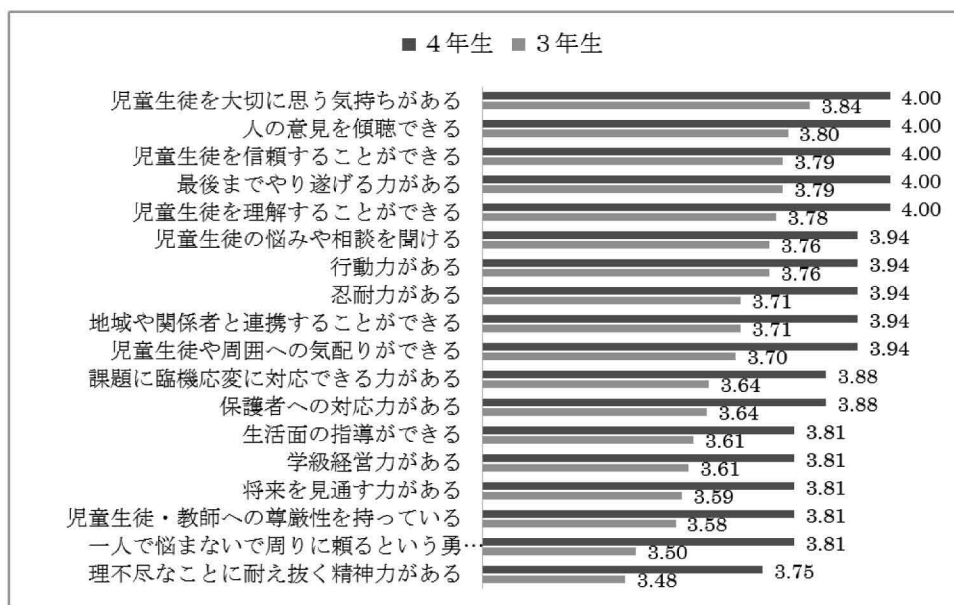


図7 評価領域のグラフ

図7は、評価領域18項目の平均点を棒グラフで示したものである。4年生では有効数字2桁にすれば、18項目すべてがX = 3.8と高い得点であり、3年生ではX = 3.5であった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、有意差が見られた(表7)。

表7 「一人で悩まないで周りに頼るといふ勇氣がある」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.813	3.514	0.299	P=0.020<0.05
標準偏差	0.403	0.579		有意差あり

同様に「課題に臨機応変に対応できる力がある」(P = 0.003 < 0.05)、「学級経営力がある」(P = 0.023 < 0.05)、「生活面の指導ができる」(P = 0.015 < 0.05)、「忍耐力がある」(P = 0.008 < 0.05)の項目に関して、4年生が3年生よりも有意に認知していた。

⑧ 感受性領域

感受性領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、感受性を働かせて状況を感じ取り、積極的に対応しようとする資質能力である。

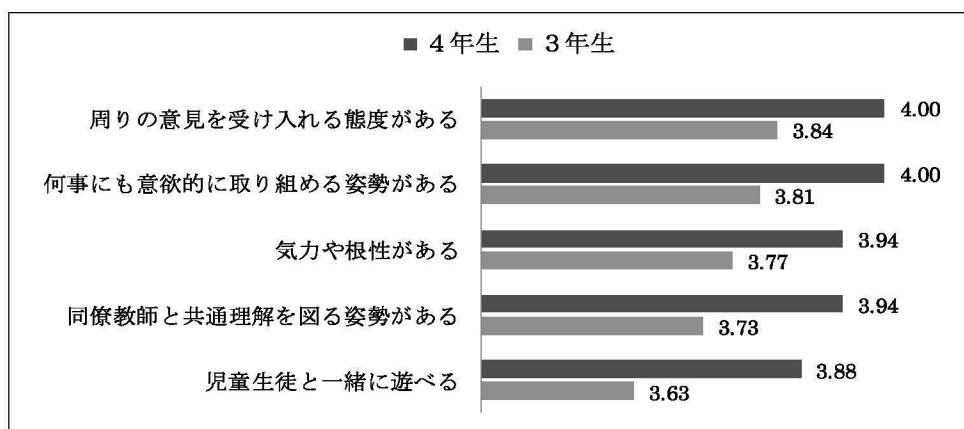


図8 感受性領域のグラフ

図8は、感受性領域5項目の平均点を棒グラフで示したものである。4年生では、いずれの項目もX = 4.00 ~ 3.88の高い平均点であり、3年生もX = 3.84 ~ 3.63の平均点であった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、有意差が見られた(表8, 9)。

表8 「気力や根性がある」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.938	3.770	0.167	P=0.048<0.05
標準偏差	0.250	0.455		有意差あり

表9 「児童生徒と一緒に遊べる」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.875	3.632	0.240	P=0.030<0.05
標準偏差	0.342	0.538		有意差あり

⑨ 価値づけ領域

価値づけ領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、対象に意義や価値を感じ、改善向上のために意欲的に取り組もうとする資質能力である。

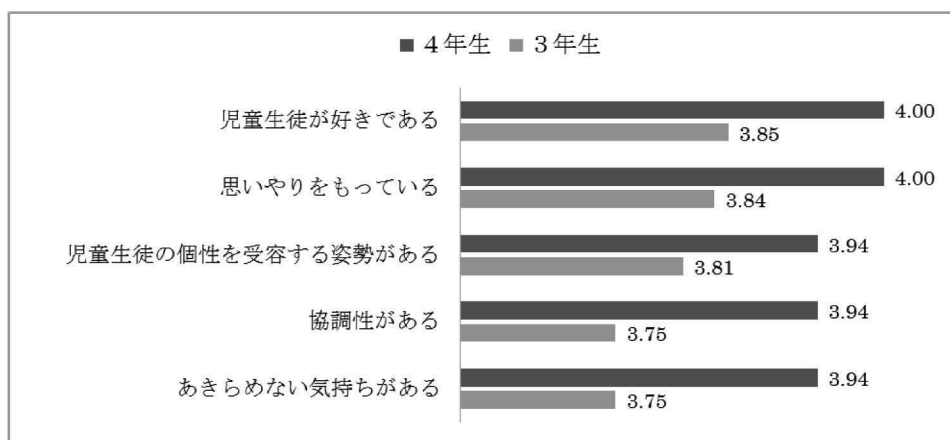


図9 価値づけ領域

図9は、価値づけ領域5項目の平均点を棒グラフで示したものである。4年生はどの項目もX=4.00～3.94の高い平均点であり、3年生ではX=3.85～3.75の平均点であった。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、「協調性がある」4年生が3年生よりも有意差が見られた(表10)。

表10 「協調性がある」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.938	3.757	0.181	P=0.034<0.05
標準偏差	0.250	0.463		有意差あり

⑩ 自覚領域

自覚領域における資質能力の全体的意味と着眼点は、自己の役割を自覚し、それを果たそうとする資質能力である。

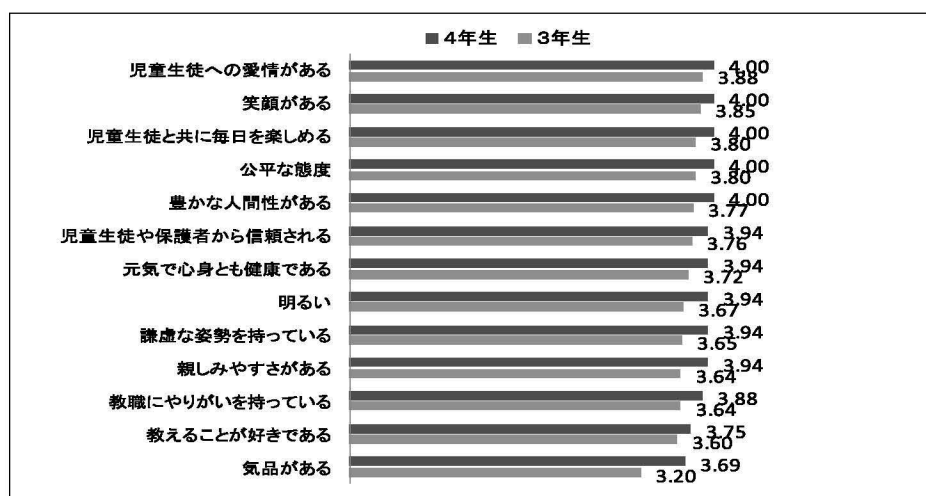


図10 自覚領域のグラフ

図10は、自覚領域13項目の平均点を棒グラフで示したものである。「豊かな人間性がある」、「笑顔がある」、「児童生徒への愛情がある」、「教職にやりがいを持っている」の項目は全員がX=4点を与えている。一方、「親しみやすさがある」と「気品がある」の2項目は他の項目に比べるとやや平均点が低い。また3年生と4年生の回答の有意性を調べた結果、有意差が見られた(表11)。

表11 「教えることが好きである」の検定結果

	4年生スコア n=16	3年生スコア n=74	平均値の差	P値
平均値	3.875	3.595	0.280	P=0.014<0.05
標準偏差	0.342	0.571		有意差あり

同様に「謙虚な姿勢を持っている」(P=0.038<0.05)、「気品がある」(P=0.007<0.05)、「元気で心身とも健康である」(P=0.017<0.05)、「児童生徒や保護者から信頼される」(P=0.048<0.05)、「明るい」(P=0.049<0.05)の各項目に関して、4年生が3年生よりも有意に認知していた。

3 考察

教員を目指している3・4年生が、教員の資質能力をどのように認識しているかをアンケート調査で調べてみた。アンケートに回答した学生は、教員採用試験に向けた教員養成特別講座等を受講している学生である。各86項目に対して、教員の資質能力として「あてはまる」と回答した割合が高かった。また3・4年生では37項目について有意差が見られた。教員

の資質能力に関しては多くの研究がなされているが、教職志望の学生について教員の資質能力を直接に求めたものは見られなかった。その理由としては、まだ学校現場のことなど十分に知っていないという考えがあるようだが、回答学生は、1年生の頃から学校現場でボランティアを行っており、学生が考える教員の資質能力が的を外れているとは言えない。むしろ学生は自分の将来を見据えながら教員としての資質能力を考えていると思われる。そうしたことは教員の資質能力についての自由記述やアンケートの回答を分析していく過程で明らかになったことである。一方、86項目を8分類して考えたが、この分類については教育学の専門家によって検討をしてもらった。その妥当性についてある程度の客観性があるものの、分類の妥当性に関しては、データ分析前の検討が必要であった。アンケート作成の客観性と妥当性は今後の課題と言える。

引用文献

- (1) 教育職員養成審議会答申「教師の資質能力の向上方策等について」文部省
昭和62年12月
- (2) 教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」
文部省 平成9年7月
- (3) 教育職員養成審議会第二次答申「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について－現職教員の再教育の推進－」文部省 平成10年10月
- (4) 教育職員養成審議会第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」
文部省 平成11年12月
- (5) 中央教育審議会答申「今後の教員免許制度の在り方について」文部科学省
平成14年2月
- (6) 中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」文部科学省 平成17年10月
- (7) 小泉令三・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文「教員養成系学部学生と教師の教職能力の認知構造の比較」福岡教育大学紀要 第38号 4分冊 159－170

資料

教師としての資質能力に関するアンケート

問1 学年・学科について (3・4)年生、(発達・基礎・文化)学科

問2 あなたの性格は人からどのように思われていると思いますか。(〇はいくつでも)

1. 明るい 2. 素直 3. のんびりした 4. 個性的 5. 神経質 6. 渋い 7. 誠実 8. 気配りのある 9. 気分や 10. 慎重 11. ユーモアのある 12. 恥ずかしがりや 13. 行動的 14. 社交的 15. 積極的 16. 大胆 17. クール 18. 保守的 19. 孤独 20. ミーハー 21. お茶目 22. 地味 23. さわやか 24. デリケート 25. 派手 26. 素朴 27. 目立ちたがりや 28. きばつ 29. 負けず嫌い

問3 下の教師の資質能力について、あてはまる番号に〇をつける。(〇は一つ)

4 (大切である)・3 (やや大切である)・2 (あまり大切でない)・1 (大切でない)

1① カウンセリングができる	4・3・2・1
1③ 児童生徒との人間関係が築ける	4・3・2・1
1④ 勉強の楽しさを児童生徒に伝えられる	4・3・2・1
1③ 理想の教師像を持っている	4・3・2・1
1④ きちんと誉めたり叱ったりできる	4・3・2・1
1③ アイデア力がある	4・3・2・1
1③ コミュニケーション力がある	4・3・2・1
1⑤ 一人で悩まないで周りに頼るといふ勇気がある	4・3・2・1
1⑤ 課題に臨機応変に対応できる力がある	4・3・2・1
1⑤ 学級経営力がある	4・3・2・1
1① 教科指導力がある	4・3・2・1
1③ 教師としての立場で児童生徒に関われる	4・3・2・1
1③ 研究熱心である	4・3・2・1
1③ 広い視野を持っている	4・3・2・1
1⑤ 行動力がある	4・3・2・1
1⑤ 最後までやり遂げる力がある	4・3・2・1
1⑤ 児童生徒・教師への尊厳性を持っている	4・3・2・1
1① 児童生徒に学ぶ意欲を持たせられる	4・3・2・1
1② 児童生徒のしつけができる	4・3・2・1
1② 児童生徒の可能性を伸ばせる	4・3・2・1
1② 児童生徒の気持ちがキャッチできる	4・3・2・1
1② 児童生徒の気持ちを踏まえた指導ができる	4・3・2・1
1② 児童生徒の支援ができる	4・3・2・1
1④ 児童生徒の主体性を大切にできる	4・3・2・1
1③ 児童生徒の成長に確たる信念がある	4・3・2・1
1② 児童生徒の長所が伸ばせる	4・3・2・1
1⑤ 児童生徒の悩みや相談を聞ける	4・3・2・1
1② 児童生徒の変化に気付ける観察力がある	4・3・2・1
1② 児童生徒の目線と考えられる	4・3・2・1
1⑤ 児童生徒や周囲への気配りができる	4・3・2・1
1⑤ 児童生徒を信頼することができる	4・3・2・1
1⑤ 児童生徒を大切に思う気持ちがある	4・3・2・1
1⑤ 児童生徒を理解することができる	4・3・2・1
1① 字がきれいである	4・3・2・1
1① 社会的な常識がある	4・3・2・1
1① 社交性がある	4・3・2・1
1④ 柔軟な思考力がある	4・3・2・1

1⑤ 将来を見通す力がある	4・3・2・1
1④ 常に何かに挑戦する向上心がある	4・3・2・1
1④ 常に何かを学ぼうとする姿勢がある	4・3・2・1
1② 常に物事を冷静に判断できる	4・3・2・1
1③ 人に共感できる	4・3・2・1
1④ 人のために何かをする奉仕の心がある	4・3・2・1
1⑤ 人の意見を傾聴できる	4・3・2・1
1④ 児童生徒の模範・手本になれる	4・3・2・1
1⑤ 生活面の指導ができる	4・3・2・1
1① 声が大きい	4・3・2・1
1④ 責任感がある	4・3・2・1
1① 専門的知識・技能がある	4・3・2・1
1① 体験活動を取り入れた授業づくりができる	4・3・2・1
1④ 知識よりも実践力があること	4・3・2・1
1⑤ 地域や関係者と連携することができる	4・3・2・1
1① 伝える力がある	4・3・2・1
1④ 統率力がある	4・3・2・1
1⑤ 忍耐力がある	4・3・2・1
1④ 粘り強さを持っている	4・3・2・1
1① 分かる楽しい授業ができる	4・3・2・1
1⑤ 保護者への対応力がある	4・3・2・1
1① 報告・連絡・相談ができる	4・3・2・1
1② 問題を解決する力がある	4・3・2・1
1⑤ 理不尽なことに耐え抜く精神力がある	4・3・2・1
1① 話力がある	4・3・2・1
1① 教材研究を熱心に行う	4・3・2・1
2⑥ 何事にも意欲的に取り組める姿勢がある	4・3・2・1
2⑧ 教えることが好きである	4・3・2・1
2⑧ 謙虚な姿勢を持っている	4・3・2・1
2⑦ あきらめない気持ちがある	4・3・2・1
2⑧ 気品がある	4・3・2・1
2⑥ 気力や根性がある	4・3・2・1
2⑦ 協調性がある	4・3・2・1
2⑧ 教職にやりがいを持っている	4・3・2・1
2⑧ 元気で心身とも健康である	4・3・2・1
2⑧ 公平な態度	4・3・2・1
2⑦ 思いやりをもっている	4・3・2・1
2⑦ 児童生徒が好きである	4・3・2・1
2⑥ 児童生徒と一緒に遊べる	4・3・2・1
2⑧ 児童生徒と共に毎日を楽しめる	4・3・2・1
2⑦ 児童生徒の個性を受容する姿勢がある	4・3・2・1
2⑧ 児童生徒への愛情がある	4・3・2・1
2⑧ 児童生徒や保護者から信頼される	4・3・2・1
2⑥ 周りの意見を受け入れる態度がある	4・3・2・1
2⑧ 笑顔がある	4・3・2・1
2⑧ 親しみやすさがある	4・3・2・1
2⑥ 同僚教師と共通理解を図る姿勢がある	4・3・2・1
2⑧ 豊かな人間性がある	4・3・2・1
2⑧ 明るい	4・3・2・1

Teacher-training course student considers qualities and abilities of teachers

Tsukasa KAWANO

Department of Education and psychology, Faculty of

Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishi-ku, Kitakyushu-Shi Fukuoka 807-8586 Japan

Abstract

We created the questionnaire about content of teachers' qualities and abilities which we should focus on 3 or 4 years students who want to be a teacher. It includes students' personality and 88 items. Then we analyzed the results. There were 8 regions of the teachers' qualities and abilities were set. It is obvious that there are differences between statistics and percentage of personality and each region. Qualities and abilities of teachers were examination of specific qualities competence from the perspective of the students who want to be teachers in the future. As the result, we can get many opinions, such as "have specialize knowledge and skills" and "have the desire to learn for students" "extend the possibility of students" "have communication skills" and so on. As a teacher there were many necessary ability to aware of the contents of qualities and abilities.

Keywords: case method, teacher-training course, quality, ability